

長谷川四郎全集 第二卷

長谷川四郎全集第三卷

一九七六年五月五日印刷

一九七六年五月一〇日発行

著者長谷川四郎

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

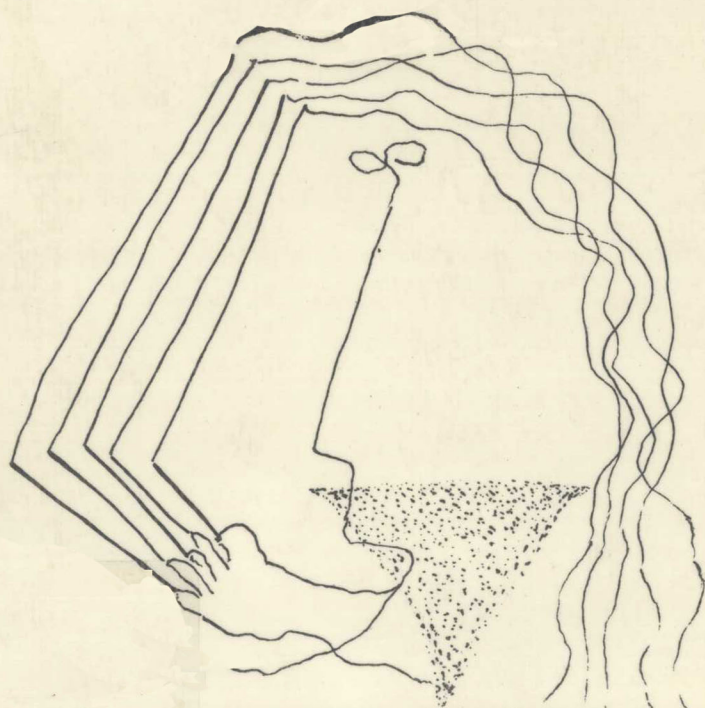
振替東京六一六一七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©一九七六年(検印廃止)落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集 第二卷



egawashr

長谷川四郎全集
第三卷
晶文社



1 無名氏の手記 7

2 阿久正の話

辻馬車 97

阿久正の話 108

チフス 127

ガンダレン 137

足柄山 151

ホテル商会 168

林の中の空地 185

3

帰郷者の憂鬱 211

メイド 201

アラビアンナイト 222

サークル誌めぐり

233

『新日本文学』の小説にかんする一会員の感想

254

作者のノート・3

263

解題 福島紀幸

272

1

無名氏の手記

目次

不幸なお祭り	9
夜窓テレビ	10
(ひぶのちく)	11
食事に御注意	14
尋ね人	16
家捜し	17
当世変形譚	20
新島出現	21
鶏鳴一声	22
茸とりにいって熊を思い出す	23
ゆきずりのひと	31
もうひとりの熊	33
おやじがまた来るぞ	39
石川三五氏	41
お名前あれば人は買う	49
帰郷者	51
観光客	53
夏	54
石川三五氏	57
地図の話	61
石川三五氏	63
鉄血救国	64
後日譚	72
病氣見舞	73
中継放送	77
犬	78
奇妙な一日	80
神は真実を知る	82
手記の終り	94

人々はこの町へ生きるためにきて、そしてどうやら……殺されるらしい。今日は春のお祭りだった。天気はよかった、というのはつまり、風もなく晴れて暖かだったのである。そして町のひなたの部分にはもうかげろうが立っていたが、しかし陰のところにはまだ霜柱が立っていた。ぼくはその霜柱をふんで歩いていった。むこうの、マーケットの旗の立った町角から、一人のみすばらしい服装の小娘が歩いてきて、すれちがうとき、焼きたてのパンの匂いがした。おそらく彼女のぶらさげている買物かごの中には、コッペが一つ入っていたのであろう。こんなことは予期しなかった。ぼくの鼻は思わずびくついた。一片のパンを食べ、いっばいの水を飲み、そして、太陽に照らされているだけで、幸福だと思ふ瞬間がある。しかし、そうはゆかないらしい。ぼくは見た、方方にいろんな塀が立っているのを。わけでも、ぼくは、長い長い灰色の塀を見た。それはまた非常に高く、おそらくはそのためだろう、いたるところに支柱がついていたが、それらの支柱はどれも、塀の内側ではなく、外側についていることがわかった。塀

の中に何があるのか、まったく見えなかった。ぼくは人に、あれはなんですか、ときいてみた——なるほど、監獄だった。なるほど、だれも支柱をつたわって塀の中へ忍びこむ者はいないであろう。ぼくはまた、金ボタンのついた黒い制服を着た人々が町の方方に立ったり歩いたりしているのを見た。彼らのある者は厳肅な整理人のような顔をしており、またある者は愛想のいい案内人のような顔をしていた。ぼくはまた、広い大通りで、シルクハットをかぶった二人連れの紳士が、背中にのぼりを立て、そののぼりになにやら書いて、メガホンでなにやら叫びながら、おどろろろ足どりで歩いているのを見た。そして、それに続いて、こんどは山高帽をかぶった数名の紳士たちが、これまた同じことを繰返して、同じような足どりで勿体ぶって行進しているのを見た。たぶん、映画かなにかの宣伝だったのであろう。ぼくは立ちどまって、彼らが何を言っているのか聞きたろうとしたが、その言葉はよくわからなかった。或いは、書物の推せんだったかもしれない。そんなことはどうでもよい。それよりも、ぼくの鼻がききはじめ

ていた。町が匂いはいじめていたのだ。それは春の浚渫されたらどぶ泥の臭気だった。それは町の体臭、町のわきがのようだった。

電車通りでは、溝の岸に生えている電柱につかまって、その電柱にかくれ、一人の乞食が、その溝の中へ下痢していた。ぼくはその臭気の中を長いこと歩いた。やがてその臭気がうすれて、遠くの方に広々とした明るい広場が現われた。広場のほとりには池があつて、池には白い鳥が浮んでゐた。ぼくは広場の芝生で一休みしようと思ひ、そっちの方へ歩いていった。「都会の中に鏡あり……。」しかし、ぼくがそこへゆく前に、沢山の人々が四方八方から続々と集まつて、広場の入口をふさいでしまつた。お祭りだつたつけ、とぼくは思った。こうしてお祭りの人波にぼくがのんきにもまれていると、突然、耳もとに叫び声を聞いた。ぼくは愕然とした。というのは、その叫び声の意味が恐ろしくはっきりとぼくにも判つたからである。

——殺されたんだ、と人々は叫んでゐた。

群衆はたちまち散らばつてしまつた。殺された人は早くも運び去られて、もうそこにはいなかった。空虚な禁断の広場が落日にあかあかと輝いてゐた。ぼくは人がその広場へ入ろうとして、そして射殺されたことを知つた……

ぼくはラジオを持っていない。ラジオは隣りの部屋が聞かしてくれる。ぼくは転々として居所をうつすが、ラジオはいたるところについてまわる。隣りの住人たちはそのラジオのかげにあつて、息を殺しているのにちがいない。彼らがおそろしい喧嘩をして殴り合つていようと、それはラジオの音にまぎれて、ぼくにまで聞えてこない。もう隣人というものはなく、ただラジオがあるばかりなのかと、思われることがある。ところで今夜、ぼくの耳はそばだった。というのは、隣室のラジオが外国語で非常のニュースなるものを伝えたからだ。まるで昔の号外みたいだった。ぼくは辞書をひいてみる。ぼくにはよくわからないが、この町はどうやら、なんとか網状組織というものの、中心にあるらしい。ラジオはたちまち浪曲にかわつた。よろしい。好奇心と想像力に富んだ貧乏なぼくは、夜の闇に面した一枚の窓ガラスを、テレビにみただることだつてできるのだ。それには、ホテルの中のある室内の光景がうつっている。ホテル？ いや、ハイツかもしれない。どつちでもいい。そこで夕食を食つてゐるのは軍服を着た外国人とその家族である。ラジオはかけっぱなしだ。夕食後、夫妻は自動車をつかて、夜の町へ出かけようとしている。ピング・ゲームで日本製デイナー・セットを手に入れようというわけだ。それとも友だちの結婚祝いのパーティーかもしれない。妻君がばかにめかしこんでゐるから。なんだつてかまわない。とにかく彼らはいそいそしている。その時、それまで聞いてもいなかった、ラジオの

やかましい掛合邊才がびたりとやんだ。夫妻は思わず顔を見合す。すると、急に生じた静けさの中で、アナウンサーの太い声が聞えてくる、——「今夜は、外出するな。」何故ならば、地震よりも不気味なものが、今日、この町のまん中で起ったからである。御感想は？ ノー・コメント。夜空にサイレンが鳴る。ジープが走る。消防自動車がかげだす。サーチライトがひらめく。ホテルやハイツやハウスの門前には、ものものしいガードが立つ。ガードたちは思い出している、——むかし戦地で歩哨に立たされたことを。彼らは守則を暗記する——。一方、室内の夫妻は窓に厚いカーテンをおろし、二人だけで酒をのみながら、トランプの独り占いをやる。子供たちがきく、——「今晩は何故、出かけないの？」「何故ってね、地震があるかもしれないからよ。」子供たちはそれがうそであることを知っている。そして父母が家にいるので、なんとなくうれしい。彼らは早くから二階の寝室にねかされるが、しょっちゅう、ことごとく階段をおりてきては、父や母に抱かれている。……ぼくは窓をあけた。そこには五月の夜がふかぶかとひろがっている。ぼくにはわかる、——今、町では殺された若者の死体が父母のところへ帰ってきた、と。いかに寒くてもいい、春のお祭りで人が殺されたりしないこと、そうだ、これがなによりも大切だ。

今日ぼくはアルバイトにありついて、ある印刷屋のメッセンジャーボーイとなり、一晚泊りの旅行をしてきた。注文とりもやったのだが、こいつは失敗だった。相手は言った、——「商売には無駄なことがあるものでしてね、わたくし、大家のすばらしい絵を仕入れたんですが、こいつがどうも贋物らしいんですよ、注文どころじゃありません。」ぼくにはなんのことかわからなかったが、ただ、商売には無駄なことがあるということだけはどうかわかった。ところで、なにはともあれ、旅行するのは大いに楽しかった。田舎町の宿屋の浴室の脱衣場で、ぼくは七福神入浴図なんてのを見た。こいつは漫画のなかなかいアイデアだった。絵は下手くそだったが、白狐みたいな弁天様を中心にして、容貌怪異な褐色の男たちが、お湯の中から顔だけ出して、みんなこっちの方を見ている図だった。それから、汽車はちょうど満員で、あいている席もなかったが、立っている人もいなかった。そして人々は腰かけて、みんな本を読んでいた。まるで移動図書館みたかった。ぼくはある詩人の言葉を思い出した、——ああ、本を読む人々のあいだにいるのは、なんといいことだろう、と。そのうち、ぼくは気がついたが、彼らはどれもみな同じ一つの本を読んでいるのだった。ああ、みんなが同じ一つの本を読むなんて、なんという楽しいユナニスムだろう。もっとも、めいめいが開いているページはまちまちだったが、みんなが同じように赤い顔

をして夢中になって読んでいた。そのため、なかには、目的の停車場であわててとびおりたり、或いは乗り越したりする人さえいた。けが人の出なかったのは、幸いだった。これがその、ベストセラーというものだ、とぼくは思った。実はぼくも買いたかったのだが出張旅費が足りなくなったのであきらめた。ぼくは窓をながめていた。「窓は本であるけれど、どの本もみな読んじやった……」で、ぼくはついに週刊雑誌を買って、すみすみまで耽読した。ぼくになにより面白かったのは、読者のページだった。週刊雑誌のマニアックな愛読者がいて、彼らは創刊号から全部そろえ、それを製本し、貯蔵し、生涯愛読しているのである。そのつぎに、ぼくが読んで面白かったのは、ニュース・ストーリーというのだった。こうして、ぼくはもう読むものがなくなったので、車窓にもたれ、退屈まぎれに、自分で一つ、ニュース・ストーリーを作ってみた。題してベストセラーというのだ。もちろん、こういう話は眠たくなるための手段である。思い出したまま、そういう一つを書いてみよう。

ある町に、一人の実直な会社員がいた。ある時、郷里の父親が死んで若干の遺産が手に入ったのだが、なかなか感心な男で、無駄づかいはいつもせず、その金をなんとかして町の文化のために使おうと考え、出版を始めようと決心した。そこで日頃から尊敬している某先生を訪問し、おうかがいを立てた。

——先生、わたくし、こんど、出版をやろうと思うのですが、なにかいい本はございませんでしょうか？

万巻の書籍にかこまれ、小さな机に面して、端坐していた先生は、この言を聞き、眼鏡をはずし、やぶにらみのような眼をして、愛想よくニコニコと微笑された。先生はこのように、いつも任意の時に、ニコニコと微笑することができたのだった。

——いい本は沢山ありますとも、例えば、今ぼくの読んでいるこの本などは、これを翻訳出版すれば、わが町の文化のため、ことに進歩的青年男女のため、非常にいいことだと思うんですが……しかし、それがねえ……、と先生は言葉をにごされた。

感心な出版屋はすぐにとびついた。

——先生、ぜひ一つ、その本を翻訳して下さい、必ずいい本に作ってごらんに入れます、ぜひ一つ、おねがいします。

先生は微笑を引込め、そのかわり眉を少ししかめて見せた。

——それだね、ぼくが翻訳するのはかまいませんがね、内容がなかなか難しい本ですから、一部の識者にしか読まれますまい、もちろん、それだけでも、充分、出版の意義がありますけれどね、しかし商売としては成立しませんよ、これだけははっきり申し上げます、せっかくお始めになったばかりで、さつそく損なされるばかりか、ひょっとすると、つぶれますぞ。

こう言って先生はまた眼鏡をかけ、効果を観察するように相手の顔をみた。ところが、出版屋はこれを聞いてますます勇み立ったのである。

——いや、先生、それならばますますやらなくてはなりません、虎は死して皮をのこす、本屋はつぶされても本はのこります。

先生は感動し、再び眼鏡をはずされ、再びニコニコと得意の微笑を浮べられた。

——承知しました、とにかくやってみましょう。

二人の文化人は固い握手を交して別れた。

それから一カ月、几帳面なる先生は公私多忙にもかかわらず約束の期日までに名著の名訳を脱稿された。出版屋は直ちに原稿を印刷屋にまわし、まず最小限度五百部を上梓した。良書はそれ自身推せんすという格言を信奉している感心な出版屋は、一行の広告も出さなかった。山なす返本は覚悟のうえだった。ところが案に相違し、一冊の返本もないどころか、注文殺到、ついに再版の余儀なきにいたったのである。再版もたちまち売り切れ、増刷また増刷、ベストセラーのトップを切って、感心な出版屋は、当然ながら、その高邁なる文化精神がむくいられ、まったく我にもあらず、しこたま儲けてしまった。もちろん感心な出版屋は金銭にはかえられない精神的歓喜を味わったのである。町に出てみるとみんなが彼の出版した本を読みながら道路を歩いていた。電車に乗ってみると、みんなが彼の出版した本を耽読していて、ために目的地を乗り越す人も続出するという有様だった。感心な出版屋は改めて先生を訪問し、なんだか悪いことでもしたように、きまりわるげに、てれくさい顔付で、こう言った。

——先生、読者というものは、まったくわからないものです、ね、あの本、とてもよく売れるんですよ、不思議なものです、ね、いまでも、どんどん売れています、どうしたものでしょう？

先生は型通り驚いたような顔をしてみせたが、それからしばし考えてから、開口一番された。

——もちろん、理解されているとは思えませんが、しかし少数者は必ず理解しています、そしてこの少数者の中に未来のモラルがあるのです、大いに読まれることは、それだけこの少数者の率も多いことを意味します、とにかくみんなに読まれれば、それに越したことはありません、まあ、遠慮せずにどんどん売ることです、すね。

知性豊かな先生のこの保証を得て、出版屋も大いに気をよくした。彼は懐中より金一封を取り出し、先生に進呈した。先生はもちろん嘉納された。

ところが一方、ちょうどこれと時を同じくして、苦々しきことには、ライバルの如く、狼麩の評判高き本が飛ぶように売れていた。誰も統計をとったものはないが、それは前記、感心な出版屋の本と同じ部数だけ売れたということである。それはバイブルや共産党宣言と同じくらい売れ、人々はこぞって、顔を赤くしてそれに読みふけた。両極の一致というおうか、ここでも人々はさかんに電車を乗り越した。感心な出版屋はひんしゆくし、それとなく三度、先生を訪問して、事のついでのようにこう言った。

——先生、あんな本があんなに売れるとはまったく嘆かわしいです、な、あんなにしてまで儲けたいのですかね。

先生は一笑に付された。

——やっぱりそうですかね、まあ、一般の読者なんて大体そん

なものですよ、しかしわれわれの本だってそれに劣らず売れてるっていうじゃありませんか、悲観するには及びません、大いに對抗してやりましょうよ。

それから二人の文化人は俗物を罵倒し、闊志満々として別れた。感心な出版屋が店に帰ってくると、店の番頭が応接間で、税務署の役人にこう言っているのが聞えた。

——手前どもでは絶対に二重帳簿を作っておりません。

……ここではくは眠ってしまった。

新聞を朝の鏡だなんて形容した人がいる。たぶん、新聞はそのように親しいものだという、新聞人の手まえみそだろう。だがもし鏡だとすれば、それは古井戸の水鏡だ。底の方からぶくぶくあぶくが湧いている。いろんなあぶくがあったところで、そしてそれぞれ別のものに見えたところで、いずれは同じ底の泥から湧き出ているのだ。とにかく、毎朝、新聞には奇妙な記事がたくさん出ている。新聞にはまた小説というものもっているが、こいつはコントラストの妙によつて、事実は小説よりも奇なりということを一段と示すためなんだろう。ところで今朝、ぼくは「食物にご注意」なんて記事をよんだ。なるほど、この町にはなんと飲食

店の多いことだろう。それから、旅行中の王子さまはへんとうせん炎にかかれたそうである。見たまえ、軒なみに飲食店だ。一種異様な臭気がただよっている。このことは、飲食店で飲食する人が多いということ、それから飲食物を販売して飲食しているのへんとうせん炎はよくなられた。これは空腹の人が沢山いるということとはもちろん別問題である。王子さまは昨夜ようやく外出、豪華なホテルのレストランで夕食をおあがりになった。その様子をお父なる王子さまはお城の中でテレビでごらんになった。概して王子さまは世界をテレビでごらんになるか、あるいはご自身テレビに現われたもうか、そのいずれかである。お城の広場には参詣人がたえない。彼らはサイゼン函のところまで行つて、満足して帰る。彼らはしつしつと歩を運ぶ。みんな、本来、反省的の度を愛する象徴主義者だということだ。彼らの足音はお城に住む王子さまを不安にしないというはなしだ。それどころか、かえつて彼をよろこばせたそうである。彼はときどき、お城からテレビに出演され、堀をへだてて、これら温和なる人々に会釈をたれ給うこともあるという。人々はそれを見ようとして、ますます集まる。新聞が新番組の宣伝をやる。結構なことだ。だが、一方、困ったことに、時あつて、お城の中でご食事中のご一家が、食事をおやめになつて、不安そうにお顔を見合わせることもあるそうだ。ほらね、遠くから、広場をどよもす足音が聞えてくる。隊伍を組んで……整然と……まるで、むかしの彼の軍隊みたいだが、ただ彼

を不安がらせるところが本質的に違うわけだ。何故なら、あれは反省的でない非象徴主義者たちだからな。そこで番犬が必要なのわけである。番犬にもいろいろあるが、王さまは、もしかすると、番犬は噛みつくほどいいと思っているかもしれない。なに？ 番犬が殴られたって？ そいつはよい具合だ。丁度、番犬をふやそうと思っていたところだからね。……で、番犬をふやされた王さまは満足してテレビをごらんになっている。おや、王子さまのお顔色はまだすぐれていないが、それでも快活な調子で陪席の侍従長らとお話しになっている。……なんと飲食店の多い町だろう。軒並みに飲食店だ。ぼくは、表側だけコンクリートの不燃質を見せかけた街路を歩きながら、飲食店というものの見あたらない簡素な町を思い出していた。あそこでは丸太小屋の群の中から巨大なアパートが出現し、それが一つまた一つと、丸太小屋を取りこわしつつあった。飲食店はない代り、町のまん中に大きなパン工場が一つ立っていた。人々はめいめいそこで焼かれたパンを抱えて街路を歩いていた。それはあたかも共同の果樹園へ行って、新鮮な朝の果物をもぎとってきたようだった。町には焼きたてのパンのよい匂いがただよっていた。……ぼんやり歩いていたぼくは突然、立ちどまった。眼の前に一人の老人が立ちはだかっていたからである。ぼくは彼の横顔にあらゆる貧困なる老人の横顔を見た。彼は顔をしかめた。すると、今までの生活の、その快楽と苦悩のあらゆる皺が一瞬集約的によるかと思われた。しかし、それはほんの一瞬間のことだった。彼はするように顔をしかめ、眼前

の飲食店のショーウィンドーの中をのぞきこんでいた。それから、次の瞬間、ニヤリと笑った。それから突如、かくして持っていた丸石でガラスを打ちこわした。すばらしい音だった。彼はそこに飾ってあった食物をつかんで食べはじめた。すると、早くも花道を通って、制服の黒い後見役がやってきた。そして早くも主役に連れそい、早くも彼を案内し、何処かへ彼を連れていった。ぼくには見れない第二幕である。間髪をいれなかった。退場に臨んで、彼は食べたものをみんなはき出してしまった。食べると同時に満腹したわけじゃない。というのは、すぐそばに野良犬が一匹のそりと寝そべっていて、びかびか光る鼻さを少しうごめかしたが、その吐き出された食物を見向きもしなかった。おそらく、なんの匂いもしなかったのだろう。もし老人に犬の嗅覚があったなら、こんな愚行をまぬかれたことだろう。ああ、なんと商売には無駄なことが多いことだろう。どうやらそれは蠟でできている人形用の餌らしかった。……そのとき王さまはテレビでごらんになっている。王子さまのメニューをまかされた侍医は若鶏の焼いたのご飯、それからブディングをさしあげたきりで、好物のぶどう酒もスパゲティも大事をとっておとめした。「食物にご注意……」